

## プログラム

---

17:30~18:30	受 付
18:30~18:35	開 会 藤原 健 (毎日新聞大阪本社 編集局長)
18:35~18:40	挨 拶 松園万亀雄 (国立民族学博物館長)
18:40~19:15	講 演① 「ネパール人労働者の素顔」 南 真木人 (民族社会研究部 助教授)
19:15~19:25	休 憩
19:25~20:00	講 演② 「チャイナタウンー変容とバイタリティー」 陳 天璽 (先端人類科学研究部 助教授)
20:00~20:30	パネルディスカッション 司会 庄司博史 (民族社会研究部 教授)

## 目 次

---

松園万亀雄 「開館三十周年記念事業みんぱく公開講演会によせて」…	1
南 真木人 「ネパール人労働者の素顔」 ……………	3
陳 天璽 「チャイナタウンー変容とバイタリティー」…………	7

---

# ごあいさつ

## — 開館三十周年記念事業みんぱく公開講演会によせて —

---

松園 万亀雄

### はじめに

国立民族学博物館（以下、「みんぱく」と略す）は、毎年、東京と大阪で公開講演会を開催しています。大阪の公開講演会では、一昨年から毎日新聞社のご協力をいただくようになりました。一昨年は「災害の記憶」、昨年は「世界の伝統芸能・最前線」というテーマを取りあげています。毎日新聞社のご協力に、厚く御礼申し上げます。

この公開講演会は、吹田市にある「みんぱく」の研究者たちの研究の一端を、地元関西のみなさんにご紹介すると同時に、文化人類学・民族学に関心をもつていただくことを目的としています。

### 国立民族学博物館開館三十周年にあたって

「みんぱく」は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、その成果に基づいて、民族資料の収集・公開などの活動をおこなう研究所です。大阪万博の跡地内に、昭和49年（1974年）に創設され、その三年後の昭和52年（1977年）11月に開館しました。今年ちょうど開館三十周年にあたります。

「みんぱく」が研究所として掲げる目的は、開館三十周年を迎えたいまも変わりません。しかし「みんぱく」をとりまく環境は、近年激変しました。研究の対象とする文化と社会が、予想外のスピードで変化しています。移動が日常化し、遠隔地とのコミュニケーションが即時におこなえるようになって、遠い外国は身近になりました。その一方で、個々の社会では多文化状況が進み、個人の生活体験に異文化の要素がさまざまな形で浸透しつつあります。

こうした変化のなかで、研究者たちは、研究の課題や研究手法を見直し、新しい研究の可能性を追究しています。博物館展示の例をひきましましょう。ある民族の文化を固定した静的なものとして展示することは、もはやできなくなっています。研究者だけでなく、展示される文化の担い手である人が、展示に参加することも多くなりました。また、これまでは展示を見る側であった市民の積極的な参加も歓迎しています。

新しい活動のひとつに、「みんぱくミュージアムパートナーズ」（MMP）があります。MMPは、「みんぱく」の博物館活動を理解し、共にこの活動を発展させることを目的として平成16年9月に発足しました。これまでのミュージアムボランティア活動から一歩前進し、メンバーによる自主的な企画・運営を行っていくため、ボランティアという言葉は使わずにみんぱくのパートナーと呼んでいます。MMPは、展示解説やイベントなどで、さまざまな活動を展開しています。

文化は交わり、変貌していきます。異なるものへの寛容と共感が求められている現代世界において、「みんぱく」が三十年のあいだに蓄積してきた調査・研究を受け継ぎ、発展させるとともに、その研究成果を社会還元し、広く社会とともに歩むことが、「みんぱく」の使命であると考えます。

「みんぱく」では今年、三十周年記念事業を展開していきます。この公開講演会もそのひとつですが、特別事業も少なくありません。いくつか例をあげますと、この3月には、「太陽の塔がつなぐ万博・民博—特別講演会・太陽の塔内部見学会」（3月10日）、「特別展 聖地・巡礼—自

分探しの旅へ」(3月15日～6月5日)があります。夏以降は、「私の選んだこの1点—研究者の目でみる民博コレクション」(仮称)、「特別展 オセアニア大航海展」をはじめとする事業が計画されています。また「月刊みんぱく350冊の巡回展」は、昨年12月に梅田からはじまりましたが、関西の各地や東京での開催も検討しています。

「みんぱく」の研究、展示、催しなどの活動について、くわしくはインターネットの「みんぱく」ホームページをご覧ください。三十周年記念事業の最新情報や、MMPの活動についても、ホームページに掲載されます。また、ホームページでは「みんぱく」が展示・収蔵している標本24万点の基本情報も公開しておりますし、文献図書資料その他の検索もできます。「みんぱく」の図書室は市民の方も閲覧できます。「みんぱく」の資料を、大いに利用していただきたいと思います。

## 講演会テーマ

### 「日本で暮らす—移民の知恵と活力」について

今回の講演では、日本で生活している移民、外国出身の人々の知恵と活力というテーマをとりあげました。日本のまちでさまざまな文化が出会い、新しいものがつくりだされつつあることに目を向けたいと思います。

少し前まで、「外国人」は日本で目立つ存在でした。しかし現在の日本のまちで、外国から来た人に出会うことはめずらしくありません。こうした状況は、この二十年ほどのあいだに顕著になってきたもので、全世界的な傾向です。人が国境を越えて移動し生活することが、日常的になってきたのです。

文化人類学・民族学は、長いあいだ、現地に赴いて調査することを研究の前提としてきました。しかし現代では、国境を越えて移動する人々の研究も、重要なテーマになっています。単に

移動する人が多くなったことを問題にしているわけではありません。移動した人々が、故国にいたときとは異なる文化を、新たにつくりつつあることに注目しているのです。

移動する人は、故国の文化を運んでいるわけですが、移動の過程でさまざまな経験を重ね、移動先の社会の影響も受けて、新しいものをつくっています。それと同時に、受け入れ側の社会の人々も、移動してきた人たちの文化の影響を受けています。現代の日本のまちで、さまざまな文化が会って、新しい文化がつくられつつあるといえるでしょう。

南真木人助教授は、ネパールの都市や村で、長年調査研究を重ねてきました。その豊富な知識と経験を背景に、日本で生活するネパール人労働者が、何をどのように経験し、どのような意識を育てているのか、調査しています。

ネパール人労働者をはじめとする外国人労働者は、日本の産業構造を下から支えている人々です。グローバル化の進行は、さまざまな移動をひき起こしていますが、移動先の社会で非熟練労働者として働く外国人労働者は、否応なくその社会の最底辺に組み込まれてしまいます。グローバル化と格差社会の構造が、手をたずさえているわけで、外国人労働者は、格差社会のひずみをもっとも直接的に経験している人々でもあります。

陳天璽助教授は、世界のさまざまな都市の華僑・華人について調査研究していて、日本のチャイナタウンも、そのような広い視野のもとにとらえています。

日本のチャイナタウンは、現代日本の消費社会のなかで、ひじょうに活気のある空間をつくっていますが、それは決して一枚岩で成り立っているものではありません。チャイナタウンの歴史に、私たちは、移民の知恵と活力の蓄積を見てとることができるでしょう。

---

# ネパール人労働者の素顔

---

南 真木人

## はじめに

少子・高齢化する日本社会。それにともない、知らず知らずのうちに増加している外国人労働者。さらには、これから介護施設や病院などで働いていることがあたり前になるであろう、フィリピン人介護師や看護師。

「みんぱく」が開館した30年前、このような時代がやってくると誰が想像したであろう。そういう私も、1980年に始めてネパールを訪ねたときの親友が、90年代に入り、日本で、2度にわたり6年間も働くことになるとは夢にも思わなかった。過去30年のあいだに日本は、エリートではない、ごく普通の人びとが、いわゆる「発展途上国」といわれる国ぐにから来日し、私たちの身近で労働者として暮らす時代を迎えた。グローバリゼーション(グローバル化)は、単なる流行語ではない。私たちの生活に直接に関係する、社会を読み解くキーワードなのだ。

## グローバル化と人の移動(移民)

グローバル化の要件を人・情報・商品・資本の国際移動・循環とすると、商品の移動はスーパーに並ぶ品物の生産地を見れば一目瞭然であり、情報の循環はネット社会を想起すれば明らかだろう。資本の移動はそうなのだろうが、私たちには実感しづらい。それでは人の国際移動はどうだろう。思いつくのは、朝青龍をはじめとするプロスポーツ選手や日産自動車のゴーン社長兼CEOのようなビジネスマンの活躍だ。

彼らは間違いなく日本に新しい空気をもたらし、それぞれの業界に活気を与えている。それは彼らが、エリートで有名人だからなしたることなのか。おそらく、それだけではないだろう。

そもそも人は商品や資本と違って、生まれ育った文化を身につけ、それを引きずって異なる文化の土地に移動する。異なる文化・違う世界との出会いは、ときには葛藤や衝突を生じさせながらも、新たな経験や発見を生み、自らの文化ともホスト社会の文化とも違う、新たな文化を創造する契機となりうる。もし、移民がもつ活力(生きる力)が私たちのそれよりも大きいとすれば、それは違いを生きるがゆえに発生する苦労や努力と、それと表裏一体の関係にある希望や意欲が、移民のほうが大きいからではないか。

## ネパール人労働者

一口に外国人労働者といっても、その滞在資格や形態は一通りでない。そこには、1990年の入管法改正によって合法的に就労できるようになったブラジル、ペルーなどからの日系人や、法的には労働者ではないが、実質それと変わらない、外国人研修生(原則1年以内)や技能実習生(研修期間とあわせて3年以内)があてはまる。ほかにも、観光などの目的で入国した人が、査証期限が過ぎても帰国せずに就労する非正規就労者(資格外就労者)がいる。

ネパール人労働者とは、この3番目のカテゴ

リーに含まれる人びとである。1990年ころから急増し、その数は4000人弱で横ばい傾向にある。彼らは東京近郊や東海地方において、工場、家内工業、解体現場、農家などの非熟練作業に従事する。20～40歳代までの男性が多く、滞在期間が10年を超えるような人は、妻を（何らかの闇の方法で）呼び寄せて共働きしている人が多い。

### ジャナジャーティと民族運動

さて、ネパール人労働者のほぼ9割は、「ジャナジャーティ」と呼ばれる先住の諸民族の出身者になる。なかでも、タカリー、マガール、グルン（タム）、シェルパ、チャンテヤール人などは、来日している人数が多く、結束力も強い。

彼らは日常のさまざまな問題を互いに助け合っ  
て解決するために、それぞれの民族協会を設立  
する。さらに、本国の民族協会本部と密に連絡  
を取り合い、寄付の提供、民族運動のリーダー  
や歌手の招へいと文化プログラムの開催、雑誌・  
ビデオの販売といった活動を実施している。

日本に暮らすネパール人労働者は、捕まれば  
本国送還という脆弱な立場にありながら、経済  
的にはあまりメリットがあるとは思えない、民  
族運動に熱心だ。民族運動は人をつなげ（支え  
あい）、民族の誇りと自尊心を取り戻すものだ  
が、日本の何が、彼らをそのような活動に向わ  
せることになったのか。ネパールの外で盛り上  
がる民族運動、その活力の秘密などについて考  
えたい。



「国際先住民の日」を祝うネパール人労働者（東海地方、2006年）



日本で稼いだ資金で開いたドホーリー（掛け合い歌）レストラン（カトマンズ、2006年）



文化プログラムで本国の音楽を楽しむ



ネパールと香港から招かれた男性歌手と女性司会者

## こ

こ数年、日本に超過滞在し働いているネパール人のことを調べている。彼/彼女の生活感覚がにじみでているが、他方で、私たちが気づかない「日本」を露わにしてくれる。調査の過程で、あるネパール人の友人から聞いた、そんな話を紹介したい。

友人が仕事からアパートに戻ると、来日して間もなくまだ就労していない関係があった。「今日は近くのスーパーで安い米を見つけたから買っておいなよ」。自慢げに見せる大きな袋は、犬の絵が描かれたドラッグフードである。世の中にドラッグフードなるものがあることを知らない人にとって、それは「犬印の米」に映ったとしても無理からぬことだ。しかも、目ごろから彼/彼女らは、日本では中身と包装のデザインが一致しないと感じているのだ。「それで返品したの？」と私が聞くと、友人はそんな恥ずかしいことはできないという。「それじゃ犬を飼っている日本人

# あるネパール人の日本経験

南 真木人 (みなみ まこと)  
民族社会研究部

## 職

場の日本人から見下されたくない、という気持ちも強い。たゞ、同僚に「お前、犬も飼ってないのに何でこんなもの買ったんだ」と馬鹿にされるに決まってる」という。こうして、ドラッグフードは押入れにしまわれた。

「ネパール人は大便の後で、水で拭くんだってな」といわれると、すかさず「そりゃあ、日本人はトイレレットペーパーができる前は何か拭いていたの？」と尋ね返す。

「ナリ紙」

「じゃその前は？」

「新聞紙だろう」

「じゃ新聞紙ができる前は？」

「知るかー」

華句は「ウォッシュレットを先取りしていたのがネパールなのだ」と言い負かす。

こんな話も聞いた。JICA(国際協力機構)の研修で、ネパールの元の職場の同僚女性が来日し、東京を案内したときのことだ。昼食に偶然入ったレストランは、お好み焼きを自ら鉄板で焼く店であった。いきなり生卵がのたまものが出てきて、女性は「えっ、これ食べるの？」という。友人もさすがにギョッとしたらしいが、ここでひるんでは格好わるい。日本人は生卵を食するし、これは付け合せのサラダだろうと思いつき、口に入れようとした。間一髪、店員が慌てふためいて飛んで来て、止めたそうだが、それからは「日本通」のメンチがはげ、せうかくのデザートが白なしになっただけというまでもない。



滞在地域にあるネパール雑貨店内。陳設は貴重な情報源である

送還されて帰国しても話はずきない。せっかく覚えた日本語を忘れないようにと、友人は日本語学校の門をたたいた。クラスを決める日本語でのインタビューに応じると「あなたはこの学校の生徒ではありません、先生です」といわれ、日本の最新事情や文化に詳しいことから、短期で日本を訪問する人の個人レッスンを任される。ある日、生徒が「先生、「ものさし」って何ですか？」と尋ねてきた。さて、「花をさす」とか「モノをさす」というし、何かモノをさしておく容器だろうと思つてそう答える。だが、後で辞書をひいて驚いたら、「生徒に正解は伝えたの？」と私が聞くと、どうせしばらくしたら忘れるだろうから、そのうち「前にもいったでしょう。「ものさし」とはルーラー(定規)のことです」とシラを切るのだそうなんだ。

あつぱれ。さすがは、危ない作業のときには日本語がわからないふりをして、日本人に交代しただけは気をつけて、それぞれの夢をかなえて帰ってもらいたいと思う。

人  
と  
生  
き  
る  
外  
国  
と

日本のなかのブラックボックス

南 真木人 (みなみ まさと)

本館民族社会研究部

見えざる恩恵

現代社会は誰のどのような仕事のおかげで、自分は豊かで、食べて、住んでいるのかが見えづらい。洋服やサービスはことごとく貨幣という価値に置き換えられ、価格でしかその有難みをとらえられない。この数年、わたしは日本に超過滞在し就労していたネパール人のことを調べているが、彼、彼女らが経験したさまざまな仕事のありようは、わたしたちが日頃気づかない産品やサービスの生産過程を露わにしてくれる。

たとえばAさんは、六月から一〇月まで農家の雇われ一人住み込んでキャベツ栽培に従事した。そこでは、ほとんどの農家がプロローカから輸送された外国人労働者を一〜二人かかえているという。七月の収穫期に入ると、早朝二時半からヘリウムを降したバルーンライトの灯りの下、言葉とともにかやべつ、刈り入れ、雑草の刈り取り作業はじまる。四時にはトラクターが到着しはじめ、約四五分で種を降したトラクターは次々と東京、名古屋、大阪などの市場へと向かう。

彼の日当は六〇〇〇円だ。食費として週一箇の食料買出しのときに五〇〇〇円が支給され、彼は自炊していた。給料は仕事の過酷さに比べると安い。だが、周りにコンビニひとつなく無駄遣いせずに行商できること、日本語がわからなくても作

業ができること、入国管理官の検査が少ないことなどが利点だ。そのためこの季節労働は未だ日によって人もない人が、他に仕事が見つけられないときに就く最後のオプションだといわれている。わたしたちの食卓にあがる旬のキャベツは、こうした外国人労働者の汗の結晶なのだ。

報われる努力と隠された事実

少し古い話だがBさんは、一九九八年まで食肉加工業に従事していた。当時肉辺の作業員には約一五〇人のネパール人が働いていたという。彼の仕事は、解体された牛肉の切り分けと雑草の、配達助手であったが、注文書が読めるようになってからは多くの仕事を任せられたという。日当は一万二五〇〇円。残業の多い月には四〇万円くらいになった。住まいは会社が所有するマンションなので家賃は不要だった。

会社では、熟練の日本人リーダーの下に二〇人のグループにわかれて作業がすすめられるが、リーダーの給料は一日に牛を何頭スケール(解体できる)かで決まる能力給である。Bさんは従来のように熟練作業をほとんど身につけてゆき、リーダーや肉邊から可愛がられたという。当時の彼は体重が七〇キログラムであったが、二二〇キログラムの肉を運べることが目標だった。この職場は一所懸命や

ればやるほど自分を認めてくれ、とても働き甲斐があったという。そんな彼の印象に残っているのは、深夜まで働かなければならないクリスマスと年末前の忙しさだ。他の肉より少し高い牛肉は、今でも日本人にとって祭日に食べるご馳走なのだろつと彼はいつ。

Cさんは家の解体業に就く。外国人労働者は現場で、建て壊された家具や家電の搬去、窓や換気の取り外し、天井や壁の取り壊しなどの手作業を担当し、それが終わると日本人が重機を使って柱などを解体する。リサイクルできそうな家具や家電は、前もって「キープ」の指示が出るが、天井などを壊しているとき一万円札が落ちてくることもあるらしい。そんな時は、誰にもいわずにポケットにしまいこむ。ヤマとよばれる分組現場ではリサイクルする鉄クズ、アルミニウムなどと、建築廃材、燃えるゴミ、燃えないゴミを振りわける。こうした作業でもらえる時給は一五〇〇円で、一日八時間働くで一萬二〇〇〇円になる。

真になるのはアスベストの取り扱った。わたしがアスベストの危険性について話をすると、はじめて耳にしたという。Cさんは、あの皮膚にチクチク刺さり、決つてもなかなか取れない瘡のようなもの、このかたという。やはりアスベストも廃棄物として出ているようだ。だが、会社は外国人労働者にアスベストの危険性や中皮腫

のことを全く伝えておらず、予防策もいっさい講じていない。最近になって重機の数を増やし、事業を拡大しているというその会社は、ニコースや情報に詳しい外国人労働者を雇用して急成長しているようだ。

満たされるべき「人権」

かつてネパールのじゅうたん工場における児童労働が問題となり、ヨーロッパで不買運動が起きたとき、わたしは解雇された児童のその後をケアしないまま不買運動はストリートチルドレンを増やすだけだと批判した。満たされる「人権」のレベルは各国ごとに異なり、学校に行かず働くことが人権にかなう場合もありうる。考えるからだと、同様には、ネパールの厳しい就職難と低賃金を知る者として、日本における外国人労働者に対する押入れの増加を二人道の「視点から批判する気になれない」。

だが、アスベストは命に関わる重大な問題だ。代わりの仕事を紹介できないだけに、今は「どんなに悪くてもマスクをすることだけは約束して欲しい」としかいえない。だが、何ができるかを考えている。AさんやBさんのように「外国人として生きる」のならば、外国人労働者に命を賭さなければならない。

---

# チャイナタウン

## —変容とバイタリティー—

---

陳 天璽

### はじめに

日本の3大チャイナタウンと呼ばれる長崎、神戸、横浜のチャイナタウン。華僑・華人と呼ばれる中国系移民が多く暮らしているこれらの街は、観光地としても有名である。美味しい中華料理が食べられ、異国情緒あふれるチャイナタウンは、観光客にとってテーマパークと化している。しかし、チャイナタウンを「非日常の空間」ととどめておくのではなく、歴史をたどり、街に暮らす人々を知ることにより、チャイナタウンの素顔、さらには日本の多文化共生のモデルが見えてくる。

### 日本のチャイナタウンの特徴

日本のチャイナタウンの特徴は、観光地化が進んでいることだ。世界のチャイナタウンの多くは、消費者の大半が現地の華僑・華人であるのに対し、日本のチャイナタウンでは消費者の9割が日本人である。また、ブランド力を有し、治安がよいことも世界的に稀な特徴である。近年は、チャイナタウンへの日本人の参入が目立ち、ビジネスの面だけではなく、華僑学校への日本人入学希望者が増えているなど教育面でも注目されている。



阪神淡路大震災以降に増えた、神戸チャイナタウンの出店。  
震災時、華僑が出す中華風の暖かい救済食は、被災者を元気づけた。



## 開港とチャイナタウン

日本のチャイナタウンの歴史は1859年、日本とアメリカの間に結ばれた日米修好条約による日本開港からはじまる。江戸幕府は、外国人に一定の区域内での居住、商業活動を認める「居留地」を与えた。欧米商人は日本との交易のため、すでに広東や上海などの商館で交流のあった中国人買弁（コンプラドール）を同行させた。漢字によって日本人と筆談でき、英語の話せる中国人は、欧米人と日本人の意思疎通に必要な不可欠な仲介者であった。交易の拡大に伴って人も増加し、居留地のなかに関帝廟や劇場など中国的な建物、中国人が営業する商店が増え、現在のチャイナタウンの原型が形成された。150年の歴史の中で、華僑・華人の互助組織である中華会館をはじめ、同郷会や同業団体、そして学校、墓地、廟などが設立され、固有のコミュニティの成熟へと結びついた。

## ハードを整備する老華僑と

### ソフトを注入する新華僑

こうしたコミュニティの成熟には各世代の華僑・華人がそれぞれの得意分野で力を振るってきたことが大きな影響を与えている。

老華僑たちは、これまでに培ってきた信用、資金力、そして日本社会との関係により、チャイナタウンのハード面の整備を続けている。それは、華僑学校、神戸華僑歴史博物館の設立運営や、<sup>パイロー</sup>牌樓の建設、<sup>マソビョウ</sup>媽祖廟の建設などがあげられる。一方、新華僑は、中国社会とのネットワーク、そして新移民に特有の向上心により、チャイナタウンに新しい情報とエネルギーを注入している。近年では、多数の在日中国紙の発行、華商大会の神戸誘致などにも表れている。こうした、新老華僑の協力により、チャイナタウンは絶えず柔軟に変容しており、またバイタリティーも再生産され続けている。



華僑学校の教室。小学一年から中国語・日本語・英語を習得し、課外活動では獅子舞など中国の伝統芸能も学ぶ。近年は日本人の入学希望者が増えている。



神戸の春節祭で町をにぎわす龍舞。特注で作った龍は日本最長とか。

## 再生産される文化とバイタリティー

現在のチャイナタウンを見ると、日本の華僑・華人の世代交代のみならず、日本人との通婚が進んでいる。年中行事は新暦と旧暦を混用しているが、仕事や休日の関係もあり、正月などは新暦に則して祝うのが主で、旧暦の新年を祝う在日華人家庭は稀であった。しかし、1980年代後半からはチャイナタウンの振興をはかる目的で、すでに廃れていた伝統行事を新たにイベントとして企画し、街の振興へと結び付ける動きが顕著になっている。

たとえば、旧暦に合わせて横浜では86年、神戸は87年から春節祭が、長崎は87年からランタンフェスティバルが開催されている。また、横浜では89年から関帝誕、2006年に建設された媽祖廟で新たに燈籠祭や媽祖祭が開かれるようになった。

こうした伝統行事のイベント化により、街はにぎやかになり、観光客の誘致によって日本社会との相互理解やビジネスチャンスの拡大に結びついていることは明らかだ。こうした活動は新世代の華僑・華人社会にとっても失われつつある伝統文化への再認識や継承、アイデンティティの確認になっている。積極的に日本社会との接点を活用していこうとする動きは、チャイナタウンに暮らす華僑・華人の活力を向上させるだけでなく、日本社会との間で磨き上げられた固有のチャイナタウン文化の形成へと繋がっている。

チャイナタウンは多文化共生の場である。グローバル化により移民が増える日本社会において、移民のコミュニティと既存の地域社会との「共存共栄」のヒントが隠されている。



2006年3月に落成した横浜媽祖廟

# MEMO

---